

# くろぐみだより

第16号 平成26年 9月 12日

「くろぐみだより」編集長、ユウジです。2学期になりました。この夏休みの間にも、子どもはみんな成長していて、驚いてしまいます。僕も、それなりに勉強しました。これから、その内容を、少しずつ園でも発信できればなあ…と思っています。

そのうち、「福島編」もやりたいと思いますが、まずは、「黒子のバスケ事件から」というタイトルで…この号のラストに載せたいと思います。長いですが！字は多いですが！たぶん損はさせません。ぜひお読みください。

## 年長・運動会に向けて (副園長)

すごくシンプルなお願いがあるのです。

年長さんが、運動会に向けての具体的な活動を始めています。

この運動会に向けて、年長さんは「みんなでやる」という体験をします。それは、それこそ年少から今まで、ずっと積み上げてきた経験があってこそのもですが、その積み重ねが、一気に飛躍するのが、この時期です。

みんなでひとつの課題に向かって、いろいろな思いを経験し、がんばり、話し合い、他者の思いを感じ、自分で考え、また話し合い、がんばる…ということを繰り返して、運動会に向かっていきます。

そこでは、一日一日、そこで起こる、一瞬の「今」が、子どもにとって、「そのときにしかない」大切な体験です。

だから、シンプルなお願いなのですが…つまり、「できるだけ幼稚園を休まないでください！」ということなのです。

もちろん、体調不良や引き延ばしなどは休まれると思いますが、例えば、「家族で出かけるので休む」というパターン…

これは実に「もったいない」と思うのです！

園の事情で「休まれると困る」という意味ではなく、純粋に、子どものためです。

その日、その時に、その場所に居合わせなければ感じられなかったかもしれない感情を、体験を、逃さないようにしたいと思います。よろしく願います。

## なぜ、子育て学級？ (副園長)

例えば、あさひ幼稚園でも、愛知県私立幼稚園連盟・環境教育特別委員会でも、僕や園長がよく言われることがあります。

それは、「保育や子育てに関係ない研修をやるよね」ということです。

先日、福島県に研修で行ってきました。

そこで、大変な震災を経て、今もまったく収束されない問題に直面している幼稚園の先生から、こんな話を伺いました。

「今は大変な状況です。

それで、幼稚園には、『こんな子どもになってほしい』という教育目標が必ずありますよね。『人のために動ける子』とか『のびのびと元気の子』とか『自分から行動できる子』とか。

それを、今、大人が、やろう、ということなんです。子どもと同じように。

人のために動けて、のびのびと元気よく、自分から行動できる大人。

私たち大人が、そんな人間として動けたら、すごく素敵なお話じゃないですか。

今こそ、それをやらなければいけないんです。わたしたち大人自身のことなんです」

本当に、その通りだな、と思いました。

あさひ幼稚園では、基本的な考え方として、子どもは「育てる」ものではなく、「育つ」もの、としています。「幼児にふさわしい環境」との関わりの中で、自ら育つ、という意味です。

なら、子どもにとって最大の環境は「親」ですよ。

「どんな親（大人）のそばにいるか」によって、子ども自ら「どう育つか」が変わってくる。

だから、やらせていただくと思っています。「一見、子育てに関係ない」子育て学級や、園長ぶつづつ会を。

わたしたち大人が、「どう生きるか？」を考えるために。

「子どもを育てよう」なんて、ひょっとしたらおこがましいことなのかもしれない。

まず、子どもの前に立つ、私たち大人自身が、どれだけきちんと大人を、人間を、やっているのか。そのことを大事にしたいと思っています。

子育て学級も、園長ぶつづつ会も、「直接、保育や子育てに関係ない」と言われることがあります。僕は決してそうではないと思っています。

だって、保育や子育てをするのは、僕ら、大人なのですから。

より素敵な大人になるために。親になるために。

ぜひ、子育て学級に、園長ぶつづつ会に、お越しくださいね！

## 黒子のバスケ事件から (副園長)

「黒子のバスケ脅迫事件」というのがありました。

簡単に言うと、人気マンガ「黒子のバスケ」作者・藤巻忠俊氏や、作品の関係先各所を標的とする一連の脅迫事件で、2012年10月に作者の母校・上智大学で不審物が見つかったのを皮切りに、数多くの企業やイベント会場が脅迫され、イベントの中止等が相次いで発生し、また作品関係のお菓子などに毒物を入れたとの脅迫もあり、多くの人に、多大な経済的損害と、精神的な不安を与えた事件でした。

こちらは、2013年12月15日に36歳の男が逮捕され、起訴、そしてつい先日、8月21日に東京高裁により、懲役4年6カ月の判決が出ました。

僕も、この事件のことはよく知らず、「なんでそんな事件起こしたんだろ？」というくらいに思っていたのですが…

この公判での「最終意見陳述」を読み、僕は衝撃を受けました。

文章を読んで、ここまで衝撃を受けたのは、久々です。

率直に言って、これは、子育てや教育に関わる人にとって、「読むべきテキスト」だと思いました。

子育てに関する情報は、園が発信するものも含めて、たくさんあります。そしてその内容は「こういう風に子育てをしよう」をいうものです。

しかし、この意見陳述にあるのは「このように育てられ、このような教育の場に置かれ、このように大人に接せられた子どもは、こうなってしまうのだ」という、ある意味「不適当な子育ての『被害者本人』による自己分析」なのです。「負の子育てテキスト」と言えるものです。

「母」という存在の大きさも、「負」によって語られます。

犯罪者に対する、教育者の言葉ではないとは十分自覚していますが、それでも、「勉強になった」と思わざるを得ません。

この全文は、A4レポート用紙4枚にもなる量なのですが、一気に読ませる力があります。文章構成力も見事です。造語による言語感覚、比喩表現もものすごく読みやすい。なにより、非常にロジカルなのです。

もちろんここで全文は引用できません。そしてなにより、この文章について、僕が補足や解説をする必要は、まったくありません。

本人によるテキストを読めば、誰でも理解できるからです。

以下に一部「子育て」に強く関わるとされる部分を引用します。そして、ぜひ、ネットで全文を読まれることをお勧めします。

認識を新たに自分の人生を改めて振り返ってみて、自分の事件とは何だったのかを改めて考え直しました。そして得た結論は、

「『浮遊霊』だった自分が『生霊』と化して、この世に仇をなした」

です。これが事件を自分なりに端的に表現した言葉です。さらに動機は、

「『黒子のバスケ』の作者氏によって、自分の存在を維持するための設定を壊されたから」

です。自分が申しあげたことを理解できる人は誰もいないと思います。自分から説明をしましても大半の人は、

「喪服（注・被告が脅迫時に使った名前）が心神耗弱による減刑を狙って『生霊』とかほざき出したwww」

「悪魔に体に乗っ取られた」とか「ドラえもんが何とかしてくれると思った」とかの方が言い訳として面白いよ」

というような感想しか抱かないと思います。そのような感想を抱いた人は、それがご自身が真っ当な人生を歩んで来た証拠ですので喜んで下さい。これから自分が申し上げることが少しでも分かってしまった人は、自分と同じような生きづらさを抱えている可能性が高いです。ですから自分はこの最終意見陳述について「で、それが何？」という反応が大多数を占めることを心から望んでいます。

説明を始める前に自分が用いる8つの言葉を列挙しておきます。まず「社会的存在」です。これと対になる言葉は「生ける屍」です。「社会的存在」という言葉は先ほど申し上げました「被虐うつ」に取り組む精神科医の著者からの引用です。

次に「努力教信者」です。対になる言葉は「埒外の民」です。この2つの言葉は自分のオリジナルです。「努力教信者」の枠内での強者が「勝ち組」で弱者が負け組です。

さらに「キズナマン」です。対になる言葉は「浮遊霊」です。「浮遊霊」が悪性化した存在が「生霊」です。良性腫瘍が癌化するのに似ています。そして「浮遊霊」も「生霊」も「無敵の人」です。

今回の事件のような普通の人には動機がさっぱり理解できない事件を起こしてしまうかどうかはまず「キズナマン」になれるかどうかポイントです。乳幼児期や学童期に「社会的存在」になれるなり、学童期や思春期に「努力教信者」になれるれば「浮遊霊」になってしまうことはありません。もし「浮遊霊」になってしまったとしても「生霊」になってしまうことはまずありません。

もちろん自分は「生ける屍」であり「埒外の民」でした。そして気がつく「浮遊霊」になっており、事件直前には「生霊」と化していました。

（中略）

人間に自分の存在を常に確信させているのは他者とのつながりです。社会と接続でき、自分の存在を疑うことなく確信できている人間が「社会的存在」です。日本人のほとんど全ての普通の人たちは「社会的存在」です。

人間はどうやって「社会的存在」になるのでしょうか？端的に申し上げますと、物心がついた時に「安心」しているかどうかで全てが決まります。この「安心」は昨今にメディア上で濫用されている「安心」という言葉が指すそれとは次元が違うものです。自分がこれから申し上げようとしているのは「人間が生きる力の源」とでも表現すべきものです。

乳幼児期に両親もしくはそれに相当する養育者に適切に世話をされれば、子供は「安心」を持つことができます。例えば子供が転んで泣いたとします。母親はすぐに子供に駆け寄って「痛い痛い飛んで行けっ！」と言って子供を慰めながら、すりむいた膝の手当をしてあげます。すると子供はその不快感が「痛い」と表現するものだとして理解できます。これが「感情の共有」です。子供は「痛い」という言葉の意味を理解できて初めて母親から「転んだら痛いから走らないようにしなさい」と注意された意味が理解できます。そして「注意を守ろう」と考えるようになります。これが「規範の共有」です。さらに注意を守れば実際に転びません。「痛い」という不快感を回避できます。これで規範に従った対価に「安心」を得ることができます。さらに「痛い」という不快感を母親が取り除いてくれたことにより、子供は被保護感を持ち「安心」をさらに得ることができます。この「感情を共有しているから規範を共有でき、規範に従った対価として『安心』を得る」というリサイクルの積み重ねがしつけです。このしつけを経て、子供の心の中に「社会的存在」となる基礎ができていきます。

またこの過程で「保護者の内在化」という現象が起こります。子供の心の中に両親が常に存在するという現象です。すると子供は両親がいなくても不安になりませんから、1人で学校にも行けるようになりますし、両親に見られているような気がして、両親が見なくても規範を守るようになります。このプロセスの基本になる親子の関係は「愛着関係」と呼ばれます。

この両親から与えられて来た感情と規範を「果たして正しかったのか？」と自問自答し、様々な心理的再検討を行うのが思春期です。自己の定義づけや立ち位置に納得できた時にアイデンティティが確立され成人となり「社会的存在」として完成します。

このプロセスが上手く行かなかった人間が「生ける屍」です。これも転んだ子供でたとえます。子供が泣いていても母親は知らん顔をしていたとします。すると子供はその不快感が「痛い」と表現するものだとして理解できず「痛い」という言葉の意味の理解が曖昧になり「感情の共有」ができません。さらに母親から「転ぶから走るな！」と怒鳴られて叩かれても、その意味を理解できません。母親に怒鳴られたり叩かれるのが嫌だから守るのであって、内容を理解して守っているわけではありません。さらに「痛い」という不快感を取り除いてくれなかったこと

により、子供は被保護感と「安心」を得ることができません。母親の言葉も信用できなくなります。感情と規範と安心が繋がらずバラバラです。そのせいで自分が生きている実感をあまり持たなくなります。

幼稚園や小学校に進んでも「感情の共有」がないから、同じ日本語を喋っていてもあまり通じ合っていません。ですから同級生や教師との関係性の中で作られる「自分はこういう人間なんだ」という自己像を上手く作れません。これが自分が生きている実感をさらに希薄化させます。また規範がよく分からないので人となじめません。ある程度の年齢になれば頭で規範を理解できますが、規範を守った対価の「安心」を理解できません。規範は常に強制されるものであり、対価のない義務です。さらに保護者の内在化も起こってないので常に不安です。また普通の人なら何でも無いような出来事にも深く傷つき、立ち直りも非常に遅いです。このように常に萎縮しているの、ますます人や社会とつながれなくなり「社会的存在」からは遠くなります。このような子供はいじめの標的になるか、極端に協調性を欠いた問題児になる可能性がとても高いのです。つまり学校生活を失敗してしまう可能性が高いということです。このことが子供の生きづらさをさらに悪化させます。

「生ける屍」には思春期がありません。感情や規範を両親から与えられず、人や社会とつながっていない「生ける屍」は、それらの間直し作業をやりようがないのです。

こうして「生ける屍」は

・自分の存在感が希薄なので、自分の感情や意志や希望を持たず、自分の人生に関心が持てない。

・対価のない義務感に追われ疲れ果てている

・親の保護を経て自立ができない。代わりに生まれた時から孤立している。

・常に虚しさを抱え、心から喜んだり楽しんだりできない。

・根拠のない自責の念や自罰感情を強く持っている。

という心性の人間となります。これは子供時代に両親から虐待を受けた人間に多いタイプです。「生ける屍」の多くは自らが虐待を受けたことに気がついてません。そして認知、つまり物の見方や感じ方が異常にネガティブになってしまっている自覚もありませんし、その原因にも気がついてません。しかし普通の人と比べれば「生ける屍」との表現が適切なほどに、生きる喜びや楽しみを感じられない人生を送っています。自分は「生ける屍」というショッキングな表現をしていますが、これに虐待経験者を侮辱する意図は全くないことは強く申し上げておきます。

（中略）

日本人のほとんどは負け組を2種類にしか分類できません。「努力したけど負け組になった人間」と「自らの意志で怠けて負け組になった人間」です。しかし分類はもう2種類あるのです。それは「不可抗力により努力できなかった人間」と「努力するという発想がなかった人間」です。

「不可抗力により努力できなかった人間」は分かりやすいです。例えば中学校入学と同時に重い病気になり10年間の闘病生活を送ったという人がいたとします。病気が治ったとしても、その人が就く仕事はいわゆる負け組と呼ばれるようなものになってしまうことは仕方ありません。人生を決定づけるティーン時代の何もできなかったからです。このタイプは基本的に無害です。本人が原因を把握しており、運命を受容できて、その枠内で前向きに生きていけるからです。

被告人質問で検察側から「お前より不遇な人は幾らでもいるぞ。それなのにお前は云々」という質問兼批判がありました。自分は被告人質問の時には上手に答えられませんでした。本人が原因を自覚できるくらいの不遇なら、かえって前向きになれるし、周囲の理解も得やすいのです。自分の不幸は不遇が中途半端だったため原因を自覚できず、周囲の理解も得ようがなかった点です。重度の障害者は福祉の手厚いケアを受けられるが、軽度の障害者は放置され気味という日本の福祉の実態と似ています。

問題は「努力するという発想がなかった人間」です。

人間はなぜ努力できるのでしょうか？それは努力の先に勝利などの報いがあるからです。少なくともあると信じられるからです。人間は参加資格のない大会に出場するために練習はできませんし、受験資格のない試験を受けるために勉強はできません。

人間が努力の先の報いの存在を信じるためには、肯定的な自己物語が必要です。これは特に凄い自己物語が必要という意味ではありません。「僕は〇〇が好きだから、プロの〇〇になりたい！」とか「私は〇〇になりたいから、その勉強ができる〇〇大学に入りたい！」ぐらいの自分の意志があればいいのです。つまり自分の人生に興味があればいいし、自分に可能性があると思えばいいのです。突き詰めれば無意識裡に「自分は幸せになりたい！」と思えばいいのです。

ところが自分の人生に興味を持てなかったり、自分には可能性が皆無だと思いついてしまう人間がいます。このような人間が「埒外の民」であり、負け組の中の「努力するという発想がなかった人間」です。

「埒外の民」は怠けて努力しないのではないのです。初めから報われる可能性がないと思いついてるから、努力することを思いつきすらないのです。この

ような世界観が形成されてしまう原因となる主な出来事は虐待といじめです。

虐待によって「生ける屍」になってしまうと自分の存在感が希薄ですから、自分の人生に興味を持たず、自分の意志も持てません。また両親からの虐待を「僕が悪い子だったから酷い目に遭った」と考えて合理化しがちです。そのような子供はどうしても自罰感情に囚われて「僕は参加資格がない」「僕には可能性はない」などと思い込んでしまい努力する意欲を持ちようがありません。また「規範を守る対価としての「安心」を得る」というサイクルがしつけで身につけていないので、努力が対価のない義務としか思えません。

いじめは人間が持つ根源的な「安心」を毀損します。いじめられた人間は強烈な対人恐怖と対社会恐怖を抱くようになります。するとチャレンジするにも失敗したり酷い目に遭うことばかりがイメージされてしまいます。チャレンジする前にその恐怖と戦うだけで疲れ果ててしまうのです。またいじめられると「自分はダメだ」「自分はブサイクだ」「自分には無理だ」という自己イメージを持ってしまいがちです。そして「ダメな自分は努力しても無駄だ」という世界観を持つに至ります。この思い込みは簡単には改善しません。また意識的にか無意識にか関わらず「不幸にはなりたくない!」としか発想できなくなります。すると普通の人が前向きな努力に使えるエネルギーを人や社会からの逃走に使ってしまいます。いじめられっ子にとって、人や社会とつながることは不幸の始まりだからです。

いじめられっ子が必ずこうなってしまうとは限りません。しつけのサイクルが上手く回っていて強固な「安心」を持っていれば、対人恐怖や対社会恐怖を抱くこともなければ、抱いたとしても回復は早く、悪化しません。もちろん両親や教師がいじめに真剣に対応することも毀損された「安心」を修復します。

まとめると認知が狂って「自分には可能性がない努力しても決して報われない」という世界観を持ってしまった人間が「埒外の民」です。「競争に参加する資格がない」と思い込み、自分の立ち位置を埒外と規定しているからです。

この「埒外の民」は周囲からはただの怠け者にしか見えません。しかし本人の主観では人や社会に対する恐怖と必死に戦ったのです。心の疲労度合は努力して「勝ち組」になった人のそれよりも大きいのです。しかし「埒外の民」は自分が「埒外の民」であることにあまり自覚的ではありませんし、そのようになってしまった原因にも気がついていません。物凄いきづらさを抱えています、それを周囲に説明ができません。周囲もそれを理解する術もなく「埒外の民」を怠けて負け組になった人間としか思いません。ですから「努力しないお前が悪い」と「埒外の民」をひたすら責め立てます。「埒外の民」は「自分がどうしようもない怠け者だったから負け組になった」という自己物語を形成します。このような自己物語を持った人間が、それからの人生を頑張る意欲を持てるはずがありません。底辺に沈殿するような人生を送ることになってしまいます。

(中略)

自分は申し上げるまでもなく「生ける屍」かつ「埒外の民」でした。

自分は言葉を発するのが非常に遅く、3歳頃まで言葉を発せず、無言でよだれをダラダラと垂らしながら焦点の定まらぬ目で中空を眺めて座っているだけの子供でした。両親は自分が知的障害者だと確信して病院に自分を連れて行きましたが「異常なし」とのつれない診断を受けました。乳幼児期の時点で自分が何らかの脳機能欠陥を持っていて「感情・規範・安心」のサイクルを上手く理解できなかった可能性が高いと思っています。

そのまま小学校に進学して物凄くいじめられました。これは「感情の共有」が上手く行っていなかった自分の変な子ぶりが招いた事態だったと今にして思います。当時は原因も分からず、ひたすらつらいだけでした。両親に助けを求めましたが、基本的に放置されました。担任教師も状況を知りながら、何もしてくれませんでした。ここで形成が不十分だった「安心」が致命的に毀損してしまい、強烈な対人恐怖と対社会恐怖を抱えるようになりました。また両親や教師など大人に対して決定的な不信感を抱くようになりました。それで「規範の共有」も上手く行かず「両親や先生に怒られるから守る」という典型的な外圧型の規範遵守人間になりました。小1・2の時の担任教師が異常な暴力教師でした。何に激昂するか子供だった自分には全く見当がつかず、ビンタをされるのが嫌だった自分は必死に担任教師の顔を伺いました。これが習い性になってしまい両親を含む全ての大人の顔を伺い、それから自分の行動を決めるようになりました。つまり自分の意志を持たないようにしてたのです。

(中略)

自分にとって努力とは報いのない我慢であり義務でした。努力と対価としての勝利や夢の実現がつながってませんでした。

自分は運動神経がとても悪い子供でした。小1の時の運動会に徒競走は8人中ビリでした。母親はビリだった自分を詰りました。翌年の小2の運動会では8人中3位でした。体育の授業での課題を自主的に練習していて、それが影響したようでした。自分は喜び勇んで結果を報告しましたが、母親は無反応でした。その翌年の小3の運動会で、やる気を失くした自分は再びビリになりました。母親はもちろんビリだった自分を詰りました。徒競走に限らず、両親はいつもよい結果を無視し、悪い結果には怒りました。自分にとって努力とは怒られるなどの災禍

を回避するための行為であり、努力の先に報いがあるとは思いませんでした。

自分は高校は地元一の進学校に行っています。自分にはその高校に行きたいという希望はありませんでした。それなりに勉強をした理由は、もしその高校に入らなければ両親に殺されると本気で思っていたからです。この時の勉強は努力ではありません。例えば道を歩いていて強盗に襲われて全力で走って逃げたとします。この時の全力の走りは果たして努力でしょうか？これは報いのないガマンでも表現すべきものです。危機を回避するためにガマンが必要なきもありません。しかし人間はこのようなガマンを生涯にわたって続けることは不可能です。

(中略)

長々と説明を致しましたが、自分が申し上げたことの意味がちっとも分らないという人も多いかと思います。ですから分かりやすくロールプレイングゲームにたとえたいと思います。

勇者は酒場で仲間を見つけてパーティを作り、街の外に出て仲間と力を合わせてモンスターと戦ってレベルを上げます。傷つけば母親の待つ実家に泊まって体力を回復します。レベルを上げている内に体力の最大値は増え、回復魔法も覚えて、実家に泊まる必要がなくなります。そして魔王を倒します。これが普通の人の人生です。

酒場で仲間になることを誰からも拒まれたり、モンスターとの戦闘で味方であるはずの仲間から攻撃されるのがいじめです。傷ついて実家に泊まって体力を回復しようとしたら、母親に宿泊を拒否されたり、母親から攻撃されて回復ができないという状況が虐待です。このような状態で自分が勇者であると信じられなくなった勇者が「生ける屍」です。体力が「安心」です。回復魔法が内在化した両親です。実家に泊まる必要がなくなった状態が自立です。勇者は「生ける屍」の呪いのため体力の最大値が増えませんが、回復魔法は覚えられませんし、街から遠くに行けません。仲間に対して不信感を持っている状態が対人恐怖で、レベル上げのために街の外に出る気が起きない状況が対社会恐怖です。レベル上げが努力です。魔王を倒すことが勝利であり努力の報いです。

そしてゲームのあまりの設定の無理さにやる気を失くしたプレイヤーが「埒外の民」です。「埒外の民」はゲームをクリアできなかったのですから負け組になってしまいます。「埒外の民」は自分のゲームの設定が狂っていることに気がついていませんから、やる気を失くした自分を責めます。しかし同時に負け組となったことに納得ができず説明ができない不満を抱えます。周囲も自分がやったゲームの設定を常識として物事を判断しますから「埒外の民」を怠け者としか理解できません。

これが自分が説明して来たことのまとめです。

「社会的存在」や「生ける屍」、「努力教信者」や「埒外の民」は、乳幼児期から思春期までの成人期以前の人間のパーソナリティを規定するものです。

問題はやはり大人になってからの精神の安定度かだと思います。それを決めるのが「キズナマン」と「浮遊霊」です。「キズナマン」は「人や社会や地域とつながっている人間」です。このつながりを糸に例えます。この糸は鋼鉄管のように太くて硬い糸から絹のように細い糸まで強度は様々です。家族の血縁的な紐帯はとてども丈夫な糸になることが多いのです。この糸の強度は家族や親族との物理的な距離とは無関係です。同居している家族と糸がつながっていないことも多いし、家族が故人でも「天国のお父さんに恥ずかしくない生き方をしたい」というような思いを持っている人は、天国のお父さんと糸でつながっています。恋人や友人も糸としての役目を果たします。仕事や地域とのつながりも同様です。つまり「社会的存在」であれば自動的に「キズナマン」になれるのです。

「キズナマン」はもちろん「絆」という言葉から作った造語です。「絆」は動物をつなぎ止める綱が語源ですからイメージには合っています。自分は「絆」という言葉が嫌いです。東日本大震災後にやたらとメディア上に氾濫するようになった言葉です。自分はこの氾濫現象に美しいイメージのばらまきで問題山積みの現実と問われるべき責任を糊塗しようとする意図を露骨に感じます。いかにもマーケティングを駆使した大手広告代理店の手法のように自分には思えます。本来の「絆」とはマーケティングの対極に位置するはずのものです。そのような「絆」でさえ大資本の商売に都合よくねじまげられてしまう現状に自分は物凄く腹が立つのです。

「浮遊霊」は「キズナマン」の対義語です。つまり「人や社会や地域とつながっていない人間」です。「浮遊霊」は人や社会や地域とのつながる糸が存在しないか、切れてしまっています。まさに糸が切れた風の状態です。「浮遊霊」は浮遊しているだけです。基本的には無害な存在です。

この世は凄まじい風が吹く荒ぶ空間です。人間は風に飛ばされては生きられません。しかし大半の人は糸でつながっているため風が吹いても飛ばされることはありません。もし瞬間的に糸が切れてしまっても「安心」を持っていれば簡単に飛ばされません。「安心」は人間の魂を重くする効果があります。重量物は風が吹いても飛ばされません。

(中略)

せつかくの機会ですので、世の中に対して真剣に申し上げたいことが幾つかご

ざいます。

昨今は虐待に関する学問的研究はかなり進んだと思います。またいじめに関するそれも同様だと思います。世の中には虐待といじめを同時に受けている子供も多いはずですが、この2つが合わさると相互に作用して子供の心に与える悪影響は甚大なものになると思います。自分は寡聞にして虐待といじめの両方を受けた子供の状態についての学問的知見を聞いたことがありません。また虐待の専門家といじめの専門家の学際的交流もあまり聞いたことがありません。虐待死といじめ自殺は子供の2大死因です。是非ともこの2つの悲劇の関連性や相互作用についての学際的研究を進めて頂くことをお願いしたいと思います。

いじめについても申し上げます。いじめと申しますと学校でのいじめが話題の中心ですが塾でもいじめはあります。自分は小5から通わされた塾でいじめられて、それが自分の対人恐怖と対社会恐怖を決定的に悪化させてしまいました。自分は塾の講師の真似事をしたことがありますが、そこでもいじめを発見しました。いじめっ子にかなりきつい口調で注意したところ塾の校長から「注意の口調がきつ過ぎる」と厳重注意を受けてしまいました。塾でのいじめは社会がその存在を把握しているのかどうかすら怪しい状況です。是非ともしかるべき機関に実態を調査して頂くことをお願いしたいと思います。自分は10年以上が過ぎた今でも、いじめられていた子の表情が忘れられないのです。

虐待についても申し上げます。「虐待」という言葉は英語の abuse の訳語 abuse の本来的な意味は「濫用・乱用」です。drug abuse は「薬物乱用」です。ですから child abuse の正確な翻訳は「子供乱用」です。虐待の本質とは「両親が自身の欲望の充足のために子供を乱用する」ということです。自分は「虐待の本来の意味は乱用」という理解が社会に共有されることを切に望みます。この理解が社会に共有されないと、日本人が子供が死に至るまでの身体的虐待かネグレクトしか虐待として認識できない状態がいつまでも続きます。

あと「心理的ネグレクト」という虐待カテゴリーの存在を広く社会に認識して頂きたいと思います。通常のネグレクトとの違いを説明します。子供が病気になっても両親がそれに気がつかず病院に連れて行かないのがネグレクトなら、病院に連れては行くが全く心配をせず「大丈夫かい？」の一声もかけないのが心理的ネグレクトです。十分な食事を与えないのがネグレクトなら、食事を与えても餌を与えるかのように出し「美味しいかい？」の一声もかけないのが心理的ネグレクトです。

自分の小学校の卒業遠足はディズニーランドでしたが自分は参加していません。風邪をこじらせて寝込んでいたからです。母親は自分に「遠足の積立金ももったいない」と繰り返しましたが「遠足に行けなくて残念だったね」とは一言も言いませんでした。このようなことが乳幼児期から積み重なると「遠足が楽しい」という感情を持ってなくなるのです。この頃の自分は既に認知が壊れていたの、熱でフラフラになりながらも遠足に行かずに済んだことを喜んでいました。

両親との心理的な交流がないと子供は何が好きで、何が美味しく、何をガマンしないといけないのかが、よく分からないままに育ってしまいます。つまり自分の意志を持つことが困難になるのです。これが「心理的ネグレクト」です。これを受けた子供は原因を把握できないまま物凄い生きづらさを抱えることになってしまいます。

(中略)

現在の日本の普通の人の多くも、正体不明の生きづらさを抱えているのではないかと思います。その原因は多くの人たちが無意識裡に抱える対人恐怖と対社会恐怖に由来すると思います。例えば溺れた人は水に恐怖を抱きます。電車の事故に巻き込まれた人は電車に乗れなくなります。道を歩いていて強盗に襲われた人は現場となった道を通れなくなります。この水や電車や道を人や社会と置き換えれば、人間が抱く対人恐怖や対社会恐怖の困難さを理解して頂けると思いますが、ましてや社会を覆う茫洋とした恐怖の解消方法など自分には見当もつきません。ただ国家の物語がやたら肯定的になっても、それによって自動的に各個人の自己物語が肯定的に書き換えられることはないただ断言できます。

「生きる力」とは何か？自分はここまで墮ちた人間ですから、それが何かははっきりと分かります。それは根源的な「安心」です。「安心」があれば人間は意志を持てます。自分の意志があれば人間は前向きになれます。「安心」が欠如し、強い対人恐怖と対社会恐怖を抱き、肯定的な自己物語を持たない人間が「生きる力」がない人間です。

子供に「生きる力」を授けられるのは両親かそれに代わる養育者のみです。学校教育で子供に「生きる力」を身につけさせることは不可能です。学校は「生きる力」の源である「安心」を毀損する事故の多発地帯です。事故とはいじめや教師の理不尽な体罰です。学校にできることはこの「安心」を毀損する事故の防止や被害の拡大の阻止だけです。

(中略)

自分は両親から「生きる力」を授けてはもらえませんでした。そのせいで自分の意志を持つことができず負け組にすななれませんでした。自分は全ての日本人から見下されてもいなければ、見えない手錠がはめられてもいませんでした。こ

れが大いなる錯覚だったと気がついた時には、自分は留置所にいました。自分は全ての日本人から見下される存在に墮ちており、本物の手錠をはめられる立場になっていました。おかしな思い込みがなければ「ヒロフミ」ではなく渡邊博史として所与の条件下で全力で生きれたと思います。そして負け組くらいにはなれていたと思います。とても残念ですが、もうどうにもなりません。

自分は小学校で同じ学年だった広野くんという男の子のことを思いつつ、この長文を書いていました。広野くんとは同じクラスになったことがないどころか喋ったことすらありません。広野くんは小1の秋に骨肉腫に憑かれて、片足の膝から下を切断する手術を受けました。広野くんが登校できるのは月曜日だけでした。朝の会と1時間目の授業だけを受けると、広野くんは入院先の病院に戻って行きました。残された片足と松葉杖を突きながら必死で歩く広野くんの姿を涙なしに見れる人間は誰もいませんでした。広野くんは闘病も虚しく小3の6月に亡くなりました。校長先生は臨時の全校集会で「とても頑張り屋さんだった」と広野くんを悼みました。元気だった頃の広野くんを知っていた同級生の女の子は「とにかく足の早い子だった。それからとても明るくていい子だった」と泣きながら自分に言いました。広野くんの発病時に担任だった先生は「苦い薬も痛い注射もガマンしたのにねえ……」と言って絶句し、その後には嘆き悲しみました。小学校時代はずっとこの広野くんのことが自分の頭から離れませんでした。自分は本気で、「広野くんではなくて自分が癌になればよかったのに」とずっと思っていました。

広野くんが生きていればきっと社会の役に立てる人間になっていたと思います。自分も生き地獄だった6年間の小学校生活を送らずに済みましたし、優しいお医者さんや看護師さんに面倒を見てもらえて、心安らかに人生を終わりにすることができたでしょう。何よりこんな気持ち悪い事件も起きませんでした。

自分が出所後の自殺の予定について申し上げたところ、

「てめえは生きてくても生きられなかった人たちのことを考えたことがあるのか！」

との説諭を受けました。大便製造機でしかない自分がこの世からの退場を選ぶことが、どうして生きてくても生きられなかった人々への侮辱になるのかが自分にはさっぱり理解できませんでした。しばらく考えて、自分に「生きる力」が欠如していたせいで「広野くんの分まで自分が生きよう」と全く考えられなかったことを咎められたのだと理解しました。

逮捕されてからの自分はとても人に恵まれていました。刑事さんは「もし渡邊さんが出所後に自殺したという知らせを聞いたら心が痛みます」と言って下さいました。検事さんからは「事件の調書を見て一度ならず何度も思ったんだけどもったいないよね。地頭はいいと思うし、手口もバカにできない巧妙な内容だ。本当はもっと世の中の役に立てたんじゃないかな」とそれこそもったいない言葉を頂きました。留置担当官さんは「あなたのことは応援しているからね。必ずどこかにあなたのことを必要としてくれる人は絶対にいるからね」と言って下さいました。

もし許されるのでしたら、出所してから自分は広野くんのお墓に花を手向けたいのです。その後に刑事さんと検事さんと留置担当官さんからの言葉を冥土の土産に無意味かつ無駄だった自分の人生を終わりにしたいと思っています。

(中略)

日本中の前途ある少年たちが「安心」を源泉に「生きる力」を持って、自分の意志を持って、対人恐怖と対社会恐怖に囚われることなく、前向きに生きてくれることを願って終わりにしたいと思います。

今回は本当にありがとうございました。

-----

『虐待の本質とは「両親が自身の欲望の充足のために子供を乱用する」ということです。自分は「虐待の本来の意味は乱用」という理解が社会に共有されることを切に望みます。この理解が社会に共有されないと、日本人が子供が死に至るまでの身体的虐待かネグレクトしか虐待として認識できない状態がいつまでも続きます。』

心に刺さるものがありましたか？

これからも、この子達が、「生きる力」を、「安心」を、「自分の意志」を。それらを持って、幸せに生きていくことができるよう…

一人の人間として、大人として、親として、教育者として、努めようと思います。

※「最終意見陳述」は、ネットで全文が読めます。

<http://bylines.news.yahoo.co.jp/shinodahiroyuki/20140718-00037501/>

※これ以前に出された「冒頭意見陳述」も、十分に裏い内容なのですが、被告本人が「撤回」と言っている以上、ここでは紹介しません。興味のある方は以下にて全文が読めます。

<http://bylines.news.yahoo.co.jp/shinodahiroyuki/20140315-00033576/>